

## ルカによる福音書12章 1-48節 「神の国の中に生きる」

### 1A 人への恐れ 1-12

1B 神への恐れ 1-7

2B 人前での証言 8-12

### 2A 財産との関わり 13-48

1B 貪欲への警戒 13-21

2B 生活についての心配 22-34

1C 気にかけておられる神 22-30

2C 御国の賜物 31-34

3B 主人の帰宅 35-48

1C 待ち受ける人々 35-40

2C 忠実な管理人 41-48

## 本文

ルカによる福音書 12 章を開いてください。私たちは、エルサレムに向かう旅の中にあるイエス様の姿を見えています。前回の学びで説明しましたが、ここに出てくる話は、「群衆の数が増えている」ということです。29 節に、付いてきている群衆の数が増えていることを書いています。つまり、イエス様が人気を得ているということです。ところが、人気というのはその中に毒のような危険性を含んでいます。イエス様についてきているようであり、実はイエス様に反対する心を十分に持ち合わせているということです。私たちも、教会の世界の中で人気がある動きの中に真っ向からイエス様の教えに反対する要素があるのです。

果たして、その群衆の中にパリサイ人や律法の専門家がありました。そして、人の持っている罪深い部分、その邪悪さを宗教という名の中で善に見せていく彼らの教えを深く嘆かれました。「忌まわしいものだ」と言われています。それは一つに、「外側をきよめる」ことです。人に見えるところでは霊的に見えても、内側は汚れていっぱいな状態です。もう一つは、「教えるけれども、その重荷を負うことをしない」という罪です。聖書の教えはすばらしいのです、けれどもそれを生活の中でどのように活かせばよいのか考慮がないまま教えている状態です。そしてもう一つ、「自分たちは悪くない」という他人行儀の姿勢です。先祖たちが預言者を迫害したのですが、彼らは預言者たちの墓を造って、「私たちだったら迫害しないのに」と嘯っています。

そこでパリサイ人と律法学者が、11 章の終わりを見てください、「イエスに対する激しい敵対と、いろいろのことについてのしつこい質問攻めが始まった。(53 節)」とあります。なぜこのような激しさが生まれるのか、それは「自らを正しいとする」という自己義認のせいです。最も悪い悪は、自分を正しいとすることです。福音においては、問題があることが問題ではなく、問題を正しいとするこ

とが問題であります。

### 1A 人への恐れ 1-12

そしてイエス様は、エルサレムに向かうに当たって、教えられた道があります。それは、「弟子になる道」です。人の子が裏切られ、十字架につけられます。この方に従う者は、自分を捨てて、十字架を負わなければいけないという教えです。そこで、大勢の群衆の中にいる弟子たちに、イエス様は特別な関心を寄せて教えられます。私たちはこれから、キリストの弟子に対する神の特別な思い、その配慮を読んでいくことができます。

### 1B 神への恐れ 1-7

12:1 そうこうしている間に、おびたしい数の群衆が集まって来て、互いに足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに対して、話しだされた。「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことです。12:2 おおいかぶされているもので、現わされないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。

「おびたしい数の群衆が集まって来」ています。このように人々が集まっている時に、私たちはどう考えるでしょうか、「ああすごい、神が働かれています！」と勘違いしてしまうのではないのでしょうか？けれども、イエス様はそこに目を留めることはありません。むしろ、警戒しておられます。そして、「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。」と言われました。

パン種について、使徒パウロはコリント人への手紙第一でも話していて、全体の中に一部の罪が入っている姿として使っていました。少しのパン種で、パンの粉全体に広がり、膨らませていきます。罪が教会の中にあると、全体にその悪影響を広がります。例えば、不品行の罪を犯している男女がいて、仕方がないとして放置しておるならば教会全体がおかしくなっていきます。そうした罪もパン種ですが、ここでは「偽善」がパン種だと言います。表向き、信心深く見せているけれども、実情とかけ離れている状態が偽善です。これは教会を腐らせるのです。ローマ 12 章 9 節に、「愛には偽りがあってはなりません。」とあります。けれども、教会の中で人のことを気にしていく動きができていくと、その作られた雰囲気の中に皆が合わせていかなければいけなくなります。だから、偽善をパン種として警戒しないといけないのです。

パウロが、ガラテヤにある教会でユダヤ主義が入り込んで、異邦人キリスト者たちも割礼を受けてモーセの律法を守らなければいけないと教えた時に、激しくそのような教師たちを非難しました。彼らはまことしやかにその正当性を論じていた訳ですが、要は、「あなたがたに割礼を強制する人々は、肉において外見を良くしたい人々たちです。彼らはただ、キリストの十字架のために迫害を受けたくないだけなのです。(ガラテヤ 6:12)」ということでした。問題は単純なのです、人によく見られたいだけなのです。

けれどもイエス様は、「おおいかぶされているもので、現わされないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。」と言われました。偽善によって、表向き良く見せていても、必ずそうした隠れたことが明るみに出されるのだ、ということです。パウロも、キリストの福音についてこう言いました。「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。(ローマ 2:16)」心の中の隠れたことが、主が戻ってこられる時に明らかにされます。福音なのか、それとも単なるキリストの名を借りた宗教なのか、終わりの日には明らかにされます。

12:3 ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。12:4 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。

イエス様は、今度は弟子たちに対して、偽善の根っこにある問題に取り組むように励ましています。それは、「人への恐れ」です。パリサイ人は、自分たちの品性よりも評判を気にしていました。自分がどう思われるか、それを気にしていることが偽善の根っこにある問題です。弟子たちは、イエス様の福音に应答した者たちです。彼らもまた、また別の次元で同じ問題に取り組みます。「迫害されることへの恐れ」です。人々に拒まれることを恐れることです。

初めにイエス様は、「ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。」と言われていました。これは福音の真理について、人々を恐れて自分たちの仲間だけで話していたとしても、それが、世が反対する時は明るみに出されるのだということでもあります。弟子たちが、ユダヤ人の指導者を恐れて戸を閉めていたことを思い出します。その真ん中に復活したイエス様が現れました。

ですから、私たちは初めから、自分たちの真理をはっきりと伝えなければいけません。それが、人々の反感を買うことが分かっても、神のご計画の全体を知らせないといけません。教会の人々によっては、自分たちが何を信じているのかを隠しながら伝えている人たちがいます。伝道する時に、「職業セミナーです」と言ってみたりします。あるいは、キリスト教の良い部分だけ見せて、肝心の、罪、神の怒り、そしてキリストの十字架による宥め、これらを伝えることはしません。しかし、隠していても神は明らかにされるのです。初めからはっきりと伝えるべきです。

12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

今日の学びでは、私たちの霊的進歩を阻む二つの大きな要因を学びます。一つが、人への恐れです。もう一つが間もなく出てきますが、財産への執着です。人への恐れを誰もが抱きます。そし

て弟子たちは、いやキリスト者は迫害を受けることを覚悟しなければいけません。そこで、イエス様が語られる、過激にさえ聞こえる言葉、けれども実は励ましの言葉を受け入れなければいけません。それは、人は命を取りさえするかもしれないが、その後は何もできないということです。人への恐れを解消する唯一の方法は、神への恐れを抱きます。人のできる究極のこと、命を取ること以上に、その後に永遠の地獄に投げ込むことのできるのは神ご自身です。

ですから、私たちは常に、動機を調べないといけません。今していることが人を恐れていることなのか、それとも神を恐れていることなのか？ということです。神を恐れて、言い換えれば神を気にして、人を気にしないで生きていくには、死後の世界も見すえて生きなければいけないことを教えています。

12:6 五羽の雀はニアサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません。12:7 それどころか、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。

イエス様は弟子たちに対して、決して恐怖を与えようとしておられません。いや、むしろ神がどれほど弟子たちに気をかけてくださっているのか、愛し、いつくしんでおられるのかを知らせたいと願っておられます。その証拠に 4 節には、弟子たちのことを「わたしの友」と呼んでおられます。神を恐れなさいと言っても、それは怖がれということではありません。むしろ、神が、雀よりもはるかに価値のある者として、弟子たちを知っておられるのです。私たちは神を、最後の審判をなさる方であることを思って恐れなければいけません。その神が自分の髪の毛の数ほども知っておられる、私たちを愛してやまない方であることを知らないといけません。これが、偽善からの自由、また人からの迫害を恐れぬ力となります。

## 2B 人前での証言 8-12

12:8 そこで、あなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。12:9 しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。

ここで、私たちの信仰告白についてとても大切な真理が書いてあります。人の前でイエスを告白することによって、神の前で自分が認められることにつながる、つまり救われるということです。ここに「神の御使い」とありますが、恐らく最後の審判において、御座のところにいる御使いたちのことを言っているのでしょう。その証言者たちのところで、イエス様が誰々を知っている、誰々を知らないと言われるのだと思います。そして、イエス様は私たちが人の前でご自身を告白するのに応じて、今度はイエス様が御使いの前で宣言されるのです。

私たちはここで、「心の中で思っていさえすればよい」という信仰は信仰ではないことを知るべき

です。もちろん、心の中で私たちは信じます。それで義と認められるとローマ 10 章にあります。けれども、口で告白して救われると書かれています。自分にだけ分かっている、他の人が証言することのできない告白というのは、本当の意味での信仰ではありません。それはあたかも、心の中で通じ合っていると言いながら同棲している男女と同じです。結婚という公に認められる行動を取ることによって、初めて二人が一つになりその結びつきが聖なるものとされているのです。

しばしば、仏壇の前に手を合わせて、「心の中では神さまに祈っている」と言いながら迫害を避けようとしている人がいますが、これはまさにイエス様には認められない信仰の持ち方なのです。人が見ていたらそれは明らかに仏壇の先祖の霊に仕えていることになり、事実、そうなのです。

12:10 たとい、人の子をそしることばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。

これは、先にイエス様が口の利けない者から悪霊を追い出された時に、「ベルゼブルによって追い出している」と言ったその言葉に対する言葉です。聖霊の業を悪霊のせいにしたことを言及しています。つまり、根本的にイエスがキリストであることを証ししておられる聖霊を否んでいるのです。イエス様はそしられた時に、十字架上で「彼らの罪を赦してください。」と祈られ、ユダヤ人の中で後に悔い改めて罪の赦しを得た人々が出てきました。けれども、その罪の赦しの備えを証しするのは聖霊であり、その福音の言葉を拒む時にその人は聖霊を拒んでいることになります。今、赦されないという罪は、キリストが罪の赦しのためにあなたのために死なれたという言葉に拒むことです。

12:11 また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。12:12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

弟子たちは、今、イエス様に激しく責めていたユダヤ人の宗教指導者と、今度は自分たちがイエスの名によって激しく責められるようになります。けれども人を恐れないで語り告げれば、必ず聖霊がその時に語ることを助けてくださいます。聖霊に満たされるための第一歩は、人を恐れないこと、それから人の前でイエスを告白することです。そうすれば聖霊に満たされて語るべき言葉を語るができるのです。使徒の働きに出てくる使徒たちの大胆さを見れば、イエス様の言葉が実現していることを知ります。

## **2A 財産との関わり 13-48**

### **1B 貪欲への警戒 13-21**

12:13 群衆の中のひとりが、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください。」と言った。12:14 すると彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任



命したのですか。」12:15 そして人々に言われた。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

群衆の一人が、イエス様に対して訳の分からないお願いをしています。ここから、イエス様に対する人気がいろいろな不純な動機からのものであることが明らかですね。イエス様はまず、ご自身は裁判官や調停者ではないことを語られます。しばしば、キリスト教会が福音以外のことを要求される時があります。けれども、イエス様を証しするのが教会です。人々の要求に応えるのが教会ではありません。

そうではなくイエス様は、神の国において大きな妨げになる事柄を取り上げて、人々を神の国に近づけようとされています。それが、この相続財産の調停を叫べ、心の動機です。「貪欲」ですね。相続財産の分与において、それを取り扱う人々の中ではこの実体を嫌になるほど実感するのではないのでしょうか。信仰を持っているとされている人々の間でも、この罪から完全に遠ざかっている訳ではありません。偽善もパン種でありましたが、貪欲も警戒しなければいけないものです。

そしてここでイエス様が大事なことを話されます。「人のいのちは財産にあるのではない」という言葉です。この「いのち」のギリシヤ語は「ゾーエ」と言います。それは霊的な命のことです。後で、「たましい」と訳されている言葉が出てきます。それは、「プシュケー」というギリシヤ語で、精神的、肉体的命のことです。いわゆる「生活」のことですね。ここでイエス様の使われているギリシヤ語、ゾーエですが、人が人として生きる価値は、財産にあるのではないということを語っておられます。しかし、それが人々が陥っている罠です。自分の持っている持ち物によって、自分は生きているのだという高ぶりを持っています。神によって生かされているのに、持ち物によって生きているのだと思っています。そのような人がどうになってしまうのか、金持ちを例えに語られます。

12:16 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。12:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』12:18 そして言った。『どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』12:21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」

ここでの問題は何でしょうか？ 私たちは財産については、他の箇所で管理者になることが教えられています。ですから、そこに貯蓄という要素も出てきます。貯蓄すること自体を愚かだと言っているわけではありません。そうではなく、財産によって心を楽しませる、つまり、財産があるから心が落ち着き、成功を求め、心が守られるという間違った安心感です。いかがでしょうか、私たちの社会

自体がそのような哲学になっています。神ではなく、財産のあること、自分の業績や成功、こうしたものが神のようにになっている社会と文化の中に生きています。そのような安逸に対して、イエス様は、「愚か者」と呼ばれています。一日のうちに、それらが瞬く間に取り去られるからです。

## 2B 生活についての心配 22-34

そしてイエス様は、先の人を恐れることと同じように、弟子たちに対しても財産について、弟子たちも同じ問題に取り組まなければいけないことを教えられます。

## 1C 気にかけておられる神 22-30

12:22 それから弟子たちに言われた。「だから、わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。

12:23 いのちは食べ物よりたいせつであり、からだは着物よりたいせつだからです。

イエス様を第一にして生きているのであれば、金持ちのような貪欲の罪からはなれることができるでしょう。ただし教会と言えども、金銭の愛から免疫がある訳ではありません。テモテ第一6章には、金銭を愛して墮落してしまった者たちが教会の中にいる様子を描いています。事実、お金の原則で教会やキリスト教の団体が動いてしまっている残念な傾向をしばしば見ます。

けれども弟子として生きていくならば、私たちはお金持ちにならず、むしろ生活の必要に事欠くのではないかという心配との戦いになります。そこでイエス様が励まされているのです。まず、頭をつかって優先順位を考えることです。着ている物と体であれば、もちろん体の方が大事です。体を隠すために、温めるために着る物があります。ところが私たちが、体よりも着る物にもっと気を使うのであればそれは本末転倒です。その優先順位が崩れる時に、私たちは心配してしまうのです。事実、今、この体がある、また息をして生きている、この事実を神に感謝すべきなのです。

12:24 鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養ってくださいます。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。12:25 あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。12:26 こんな小さなことさえできないで、なぜほかのことまで心配するのですか。

イエス様は再び、弟子たちがいかに大切にされているかを語られています。鳥にさえ示されている神の憐れみは、ましてや弟子たちには特別に注がれているのです。そこでイエス様は、弟子たちが陥ってしまう欠けを叱責されています。命について、それは全く自分の制御できるものではなく、必ず神の時に終わりを告げます。けれども、何とか伸ばそうとして気を使うのです。もちろん、私たちは聖霊の宮として与えられている肉体があります。けれども、それを所有しているのは神であり、神が命を決めておられるのです。

12:27 ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして育つのか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。12:28 しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくしてくださるでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。

繰り返しておられます、神が良くしておられるのだと励ましておられます。「信仰の薄い人たち」と言われていますが、それは怒っているのではなく、神の愛を信頼しきれない勿体なさを嘆いておられる言葉です。

12:29 何を食べたらよいか、何を飲んだらよいか、と捜し求めることをやめ、気をもむことをやめなさい。12:30 これらはみな、この世の異邦人たちが切に求めているものです。しかし、あなたがたの父は、それがあなたがたにも必要であることを知っておられます。

「この世の異邦人たち」というのは、神を知らない人々のことです。神を知らないから、こうしたものでいつもあくせくしているけれども、あなたがたは養う父が天におられると言われます。

#### 2C 御国の賜物 31-34

ここまでの言葉は、マタイ伝にある山上の垂訓でもイエス様が語られていたことですね、ルカ伝にはさらに加えた言葉をイエス様が語られています。

12:31 何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。12:32 小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。

良い日本語訳ですね、「何はともあれ」という言葉です。何を着るか、何を食べるかというような類いのことは、何でもよい、ということです。そういったことではなく、神の国を求めていきましょうということです。他のことは神が気にかけておられるので、あなたがたが集中すべきは神の国です、ということです。そして、すばらしいのは、私たちには無尽蔵の富を与えられます。「喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。」という言葉です。この地が回復して、キリストが王となる神の国において、それを相続することになります。しかも父なる神は、喜んで与えられます。父として、神は私たちに気にかけておられるのです。さらに、「小さな群れよ」と言っておられますね。この世の価値観からすれば、私たちはいつも小さな群れです。世に対して支配的になることはなく、むしろ周縁に押しつけられているほうです。けれども、イエス様はそのことをよくご存知で、父なる神の愛を示しておられます。

12:33 持ち物を売って、施しをしなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのな



い宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることがありません。12:34 あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです。

神の国の人、この世の人と違う原則で動いています。この世の人は自分のために蓄えます。けれども、神の国の人、天のために蓄えます。天に心がいつもおかれているように、自分の財産を敢えて捧げることもあります。捧げれば、自分は天に思いを馳せることができるということではなく、天に思いを抱き続けているために、自分の持っている物を手放しても構わないのだという姿勢であります。

### 3B 主人の帰宅 35-48

そこでイエス様は、人を恐れてはいけない、財産に心を留めてはいけないと避けなければいけないことを話した後で、今度は気にすべきところを語られます。すなわち、主イエスの到来と神の国であります。

### 1C 待ち受ける人々 35-40

12:35 腰に帯を締め、あかりをともしなさい。12:36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。12:37 帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。

腰に帯を締めることは、給仕をする時に動きやすくするために腰の裾を上げることであります。そして、明かりを灯すのはもちろん部屋を明るくしておくことです。主人が婚礼から帰ってきます。その婚礼は何日も続き、一週間になることもあります。いつか分からないのですが、主人が帰って来たらいつでも用意できているようにするのです。ですから、気にしていることはもはやこの世にある財産ではなく、主人に仕えるその心だけです。

そしてすごいことが書いてあります。主人のほうで給仕をしてくれるというのです。これはどういうことか？ イエス様が、私たちを神の御国に入れれば、私たちを御国の祝宴に招いてくださるということです。それだけ主は、ご自身に仕える者たちを御国において大いに祝福したいと願われています。この心を私たちは知らないといけません！ 先ほどから、父なる神が、主イエスがどれだけ私たちに気をかけておられるのか見ることができました。だから、私たちがいかに自分の命を生かさなければいけないか、気を使っていることを「何をやっているのだ！」と叱責しておられるのです。

12:38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。12:39 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。12:40 あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。」

ここにある暗喩は、この世が暗くなることです。状況が自分に不利であっても、それでもきちんと主に仕えているという態度でいるならば、幸いであるというのです。「忠実」という言葉を思い出しますね。「ローマ 13:12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」パウロはテモテに対して、時が良くても悪くても御言葉を宣べ伝えなさいと言いました。時が悪い時に私たちがいかに、主人をしっかりと見つめて、神の国の到来に備えていることができるのかが問われています。

### 2C 忠実な管理人 41-48

12:41 そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえは私たちのために話して下さるのですか。それともみなのためなのですか。」12:42 主は言われた。「では、主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食べ物を与える忠実な思慮深い管理人とは、いったいだれでしょう。12:43 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。12:44 わたしは真実をあなたがたに告げます。主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。

ペテロの質問に対して、イエス様は今度は管理者、すなわちペテロのような教会の指導者や奉仕者に対して、今の例えを当てはめておられます。しもべといっても、その下にも世話をする人たちがいるような管理人としての僕であります。食事を与える僕ですから、これは霊の糧を人々に与える奉仕にあずかることです。これをいつもきちんと与えている時に、主人に気に入られるのです。ですから、なおのこと牧者や教師、その他、日曜学校で教えている先生、小さな交わりで御言葉を分かち合うことを導いている人々、あるいはある人を弟子にするために時間を費やし、祈っている人もいることでしょう。大事なものは、いつでも同じように養っていることなのです。「これらの務めに心を砕き、しっかりやりなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うことになります。(1テモテ 4:15-16)」

そして、やはりイエス様はここでも、「主人の全財産を任せるようになる」と言われて、御国を与えられる、給仕をして下さるという至福と同じことを語っておられます。

12:45 ところが、もし、そのしもべが、『主人の帰りはまだだ。』と心の中で思い、下男や下女を打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めると、12:46 しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じめに合わせるに違いありません。

ここでの問題は、「主人の帰りはまだだ。」と心で思うことです。私たちが、任された人々のために与えられた時間やエネルギー、そうしたものを自分のために使い、そして自分のために自分の働きを助けている人を利用していく、ということが教会に中でさえ起こり得ますし、事実、起こっています。その理由が、主人を見つめるのをやめてしまい、目を離してしまい、この世の財産であるとか、

また人への恐れであるとか、この地上のものに目を留めてしまうからです。

12:47 主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。12:48 しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しく済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。

今晚の最後の箇所ですが、ここでのまとめは「主人の心」です。主人がここまで私たちをよく思っておられるということを私たちは見てきました。その心をどこまで知っているか、これが私たちに与えられた課題です。親しく接してくださるイエス様にどれだけ近づいているかにかかっています。

そして、そのことを知っていながら信じないで、他のことを行っていればひどく鞭打たれ、そうでなければ鞭打たれますが、それほどではありません。私たちがどれだけ知っているかどうかによって、その影響力は計り知れないからです。多くを知っている教師が、律法学者のようにその知識をきちんと管理しないているならば、打ち叩かれる人々がそれだけ多くなります。ですから、教師たちには格別に厳しい裁きがあります。

知っているだけで行わないというのは、偽善者でありパン種です。したがって、私たちが知識だけの聖書の学びというのが、実は危険であることが分かります。イエスさまの心を知る、神を知って変えられていくという目標こそが、私たちがこのような罰を免れる方法であります。